

蒼蒼として昏く，深く

浅野真也

(2002年度 B, 2004年度 M, 2007年度 D)

私は、言語学を専門としている。誤解を恐れずに言えば、ことばそれ自体がヒトの心に備わった進化の賜物であり、自然の織り成す芸術作品である可能性を追求する学問分野だ。ところで、大学への入学当初、私は文学の講義を中心に受講していた。当時の私は、ことばにより生み出される物語という芸術の森への興味と脅えを持ち合わせていたように思う。文学研究への道を選択しなかった理由に、樹林の奥に潜むものへと抱く畏怖の念ともいべきものがあったのかもしれない。しかし、博士論文を終え、憑き物がとれたように思って、ふと立ち寄った本屋で手にした文学研究の本を夢中で読み進めるうちに、大学時代に点されていた火が、今でも私の心に燻り続けていることを知った。私は、ことばそのものの森にも、そして言(こと)の葉が繁茂する森にも魅せられた人間であることを、改めて思い知らされた。幽鬼を彷彿とさせることばの森を前にしたときに、自らが抱く父なるものへの畏敬、そして心に充満する探求への渴望を再認識したのである。

私がそもそも英文学科に入学した理由に、ことばへの関心があったのは間違いない。しかし、当時の私の心をとらえたものは、頼りなく、極めて漠然としたものであったように思う。英米文学、日本文学、文学というもの自体への興味、そして、英語、日本語、英語と日本語の違いへの興味、さらには記号というものに捕われてしまうヒトへの興味……それらを列挙したとき、その共通項として浮かび上がったものの一つに、ことばがあったというくらいのものであろう。今振り返ると、当時の私を駆り立てたのは、あくまで言の葉であり、その背景に悠然と構える言の森ではなかった。そんな近視眼的な自分が、なぜ母語の日本語ではなく英語を専門として選んだのかを考える

と、我が事ながら不思議でならない。英文学科に所属しながらも、日本文学や日本語学の講義を受け続けたのは、日本語への興味が忘れられなかったからかもしれない、また自らが下した選択への自信の無さゆえかもしれない。どこに向かおうとしているかも分からない自分の進む先を、英語が導いてくれるのではないかという漠然とした直観があっただけではなかったか。

そして、冒頭でも述べたように、私が最終的に選んだのは言語学への道だった。ゼミ選択の頃、文学への興味と、ことばそのものへの興味とを天秤にかけてのことだろう。当時副詞と前置詞の区別すら明確でなかった私が、なぜ言語学を選んだのだろうか。冒頭で挙げた文学への敬畏に加え、他に挙げるとすれば、ことばの背後に潜む幻姿への無知だろうか。私はこの英文学科で、手探りと直観だけを頼りに、方角さえも分からぬまま、道なき道を進んできたように思う。そんな私にさえ、英文学科は英語の森のありかを教え、そして英語以外の言語の森をも垣間見せてくれた。英文学科にて、母語の森の深遠に触れることができたのは、嬉しい誤算であった。

かくして、英語は、私を数々の不思議の森の入口へと導いてきてくれたし、今も導き続けてくれている。最新の科学研究への門戸を開いてくれるものとして。文学作品の魅力を伝えてくれるものとして。そして、言語そのものが森であるということを教えてくれるガイドとして。それらはいずれも、学生時代に想像していたよりも多岐にわたり、それぞれが踏み入れるのも躊躇われるほどだ。

私はまだ、茫々たる森の入口で立ち往生している。足を踏み入れれば、たちまち迷い込みそうになり、あわてて引き返すさまである。一旦踏み入れる覚悟を決めたとして、どこへどのように進んでいけばよいのか。森の奥は深く、そして昏い。しかし、それだけに魅力的であるということも、英文学科から教わったように思う。鬱蒼と茂った草木を掻き分けて、或る地点を目指し練り歩き、たどるべき小径を自ら手探りで築き上げるのも自由だろう。あるいは、木漏れ日に歩を休めてもよいのかもしれない。足元の落葉を拾い上げ、その色・形に思いを馳せながら散策する人をも、森は悠然と受け入れて

くれる気がする。入学当時には不分明だったことばへの興味に陽光を照らし、その向ける先にまで導きを与えてくれたのは、まぎれもなく英文学科であった。さらに、今の私を形づくる学問的知識や思考法は、この英文学科に負うところが大きい。厳しく、そして心優しい教授の方々にお会いすることができ、多くの先輩、同輩、後輩の方々と出会うことができた。改めて思い返し、感謝に堪えない。

私が英文学科にお世話になるのも十年余となる。その間に、英文学科の研究室は、アカペラの練習歌が中央芝生から届くなか、学生・院生が活発に議論を交わす憩いと学びの園となった。80周年を迎えた英文学科の辿ってきた歴史のうち、私が知るのは微々たるものに過ぎない。足を踏み入れるたび、英文学科研究室自体が、一つの雄大な森であることを思う。80年もの間、英文学科の内外に起こった変化について推し量るのも憚られるが、学生にとっての関門であるこの学科で、数多くの人たちが集い、様々なことを学び、様々なことを感じたであろうことを想像すると、身の縮む思いである。

末尾になりましたが、英文学科のさらなる発展をお祈りしております。より多くの学徒が、この英文学科にて様々な学問の蠱惑の森へといざなわれんことを。